

子供と蚕が紡ぎ出した住民交流の糸

宮城教育大学教職大学院 特任教授 猪股亮文

地元地方紙に掲載された記事の見出しに目が留まりました。それは、つながりが希薄になりがちな都市部のマンションで小学2年生の男の子が飼育する7匹の蚕が住民交流の糸を紡いでいるというものでした。

蚕は餌や環境に対して大変敏感な昆虫と言われています。餌とする桑の葉も農薬が使われたものは食べないため、餌となる桑の葉探しも一苦労です。また、蚕は温度や湿度の変化にも弱く、病気予防のためには、適切な管理を欠かすこともできません。

私は、このように多くの手間と知恵が必要とされる蚕の飼育を小学2年生が行い、その蚕が住民交流の糸を紡いでいることに感興を覚え、学内の同僚、友人・知人に当該記事を紹介しました。

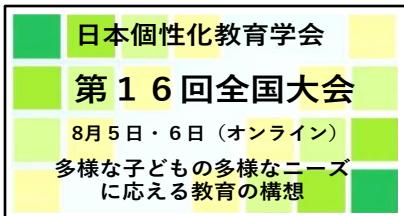
後日、この小学2年生の男の子が本学の附属小学校に在籍していることを彼の1年生時の担任から知らされました。彼は、1年生の生活科で蚕飼育を行い、蚕の一生を直に目にすることとなりました。もともと昆虫好きではあったものの、多くの気付きや発見が蚕への興味・関心を一層高め、蚕飼育に没頭するようになった彼は、遂には自宅で飼育を始めることを母親に懇願したとのことでした。

記事によれば、彼が自宅で蚕を熱心に飼育していることを知ったマンションの管理人の方が蚕に寄せる彼の思いを汲み取り、彼に対して1階ロビーで蚕を飼育、展示することを提案したことです。

ロビーで彼が蚕の飼育、展示を始めると、その姿はマンションの住民の間で話題となり、住民が彼に対してねぎらいや励ましの声を掛けたり、蚕の餌となる桑の葉を提供したりなど、住民と彼との交流が生まれました。そして、蚕の世話をする彼の様子を見守る住民同士の間にも笑顔の交流が見られるようになりました。蚕と彼を中心とした住民交流の輪は現在も広がり続けているものと思います。

生活科を起点とし、自身の興味・関心に基づいて「蚕と共にある暮らし」を実現させた彼は喜びと幸せを見出し、その幸福感や満足感は心に深く刻まれていくことでしょう。また、彼が実現させた「蚕と共にある暮らし」は、住民の多様性を包み込みながら、住民同士の関係性にもよい影響を与えていくように思えます。生活科の学びを起点として蚕と彼が紡ぎ出した糸が、これからも、彼と住民の方々との思いを紡ぎ続け、一人一人の幸せを紡いでいくことを願ってやみません。

個性化教育の中核を 担つて半世紀



第16回全国大会は、8月5・6日、『多様な子どもの多様なニーズに応える教育の構想』のテーマで開催されました。2日間を通して、約300名の参加があり、講演、シンポジウムでは、各先生方から、新しい知見やこれからへの指針となるご意見を頂戴しました。また、各分科会や自由研究発表でも貴重な報告や活発な質疑応答があり充実した会になりました。

文部科学省の石田有記先生は、講演で、膨大な資料をもとに、学習指導要領の変遷とこれからについてお話しされました。その中では個性化教育学会の誕生につながるような教育行政の解説もあり、大いに参考になりました。今号では会員の皆様に第16回の全国大会の報告を行います。

(講演資料等はホームページで閲覧できます。パスワード：2023koseika)

◆日 程

8月5日	9:45~10:00	開会行事
	10:00~11:10	講演：「学習指導要領についてー『これまで』と『これから』ー 石田有記（文部科学省）
	11:20~12:30	講演：「一人一人の違いを前提とするフィンランドの教育」 伏木久始（信州大）
	13:30~16:30	分科会1 「個別最適な学びを通して教科の本質に届く」 コーディネータ：藤本勇二（武庫川女子大） 分科会2 「子どもの学びの文脈を大切にする教師 —子どもと共に創る授業の構想と展開—」 コーディネータ：渡部 力（東北文化学園大） 自由研究発表1
	16:45~17:45	理事会

8月6日	9:30~12:30	分科会3 「子どもをみとり、ニーズに応える単元内自由進度学習」 コーディネータ：佐野亮子（東京学芸大） 分科会4 「小学校英語科の授業における子どもの学び—教科化とその展望—」 コーディネータ：加藤幸次（上智大） 伊藤静香（帝京平成大） 自由研究発表2
	13:30~16:30	シンポジウム「多様な子どもの多様なニーズに応える教育の構想」 コーディネータ：奈須正裕（上智大） シンポジスト： 高橋 純（東京学芸大） 涌井 恵（白百合女子大） 加固希支男（東京学芸大附属小金井小）
	16:30~16:40	閉会行事
	16:40~17:10	会務総会

講演：一人ひとりの違いを前提にするフィンランドの教育

信州大学教授 伏木久始

<フィンランドの暮らし>

はじめにフィンランド人の暮らし方の紹介をする。①フィンランド人は世界幸福度ランキングで6年連続1位を獲得している。残業はほとんどなく、有給休暇は100%使い果たしている。②男女平等と公平でフラットな組織・人間関係である。男女平等で共働きをするし、父親の育児休暇を8割が取得している。③Well-being を高めるマインドがあり、政治家や公務員に対する信頼度が高い。④無駄を省いて生産性・効率性を重視している。デジタル化・カード社会であり、ペーパーレス社会となっている。⑤自然の中で健康的な生活を大事にする生き方をしている。週末には極力仕事をせずに、近くの森や湖でリフレッシュする。⑥生涯学習社会から進んで、継続教育と言われるようになり、大人が学び続ける姿がある。

<フィンランドの教育>

その質の高さは、教師が大学院までの学歴をもつことや教育費が無料であることが主な理由だが、1年間フィンランドで過ごした経験から、高度な社会福祉国家としての諸制度と、一人も取り残さず多様な個人を生かそうとする理念と、豊かな自然環境のなかで生活することを優先する価値観に支えられていることを知った。

また、教師の力量の高さは、複数年にわたる充実した教育実習を行うなど教員を養成する大学の役割が大きいが、シンプルな学習指導要領をもとに、国が地方自治体を、自治体は校長を、校長は教師を信頼していることで、教師の教育実践に

おける自由裁量が多く与えられていることによる。フィンランドの教育経営方針は、「信頼」をキーワードとしている。

多様な子どもたちを共通の学び方で学習進度もそろえる日本の授業に対して、フィンランドでは、「一人ひとりは異なる」という事実を前提に授業を行っている。教師には横並びの意識はなく、また教科ごとの時数管理をする必要がないなど、それぞれの教師が自由にカリキュラムをマネジメントすることが出来ていて、教師たちの自律性や働きやすさを助長している。

<日本に生かしたいフィンランド教育>

次に日本の教育にも生かすことが出来るフィンランドの教育を以下に挙げる。子どもは、どんなに幼くても、社会の一員という扱いを受ける。クリティカルシンキングを重視する学校の授業を通して、自分の考えを持てるようになる。このようなフィンランド教育の特徴としての、アントレプレナー教育は、「私は社会に影響を与えられる・変えられる」というマインドを育成する教育である。

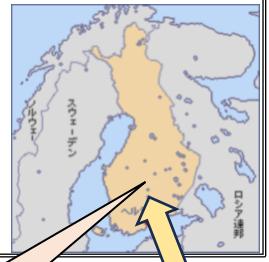
また教師像としては、「分かる人は？」ではなく「あなたはどう思うの？」と問う教師の姿や、学習した結果を叱るのではなく、その努力を讃める教師の姿が挙げられる。学校生活においては、子供に対して過度なストレスやプレッシャーを与えることなく、自然の中で体験すること、友だちと遊ぶことが優先される学校生活が挙げられる。

(文責・東京・大野)

特 別 寄 稿

フィンランドで暮らして思うこと

信州大学教授 伏木久始



ユバスキュラ

フィンランド

◇フィンランドの夏は最高のシーズン

フィンランドは国土全体が北緯 60 度以北にあるため、夏は深夜でも屋外で本を読める明るさなのに對し、冬期は日が短いだけでなく太陽をみる晴れの日がほとんどありません。12 月になると雪が降るので一面が銀世界に変わりますが、11 月は暗黒の季節と言われ、気分が鬱になりがちです。長い冬が明けて 5 月になると雪が解け、6 月初旬に学校が夏休みに入る頃、フィンランド人が待ち望んでいた最高の季節＝夏となります。

◇緑と湖に囲まれたユバスキュラ

私が一年間住んでいたユバスキュラという街は、フィンランドの中でも最も湖が多い湖水地方の都市でしたが、毎日のジョギングや散歩コースにしていた湖にも、5 月末から続々とサウナ付きのボートハウスが増え、7 月まで湖にはたくさんの家族がバカンスで集まっていました。仕事から離れて水遊びやフィッシングや読書を愉しむために自然の中に身を置くのです。フィンランド人の多くは、電子機器をこういう場所には持ち込みません。



サウナ付きのボートハウスが出現する
初夏の湖
私のジョギングコースでもあった

◇有給休暇は使い果たす

日本の昭和的な働き方に全身染まっている私には驚くことばかりで、有給休暇は毎年すべて使い果たすことを前提で考えるフィンランド人は、仕事よりも家族生活を優先します。

また、チルドレンファーストの国ですから、子どもの育ちに合わせて親や社会が働き方を調整するのです。

例えば、子どもたちは 2 ヶ月以上の夏休みを過ごしますが、この時期に父親と母親が休みを調整して、子どもが思いきり夏休みを楽しめるよう交互にあるいは一緒に仕事を休むことになります。たっぷり休みをとることで仕事のパフォーマンスが上がると考えるフィンランド流の働き方を真似てみたいですね。



週末に多くの家族がピクニックする森
誰でも自由に使えるバーベキュー小屋

◇人手不足の夏休みとキャリア教育

前述のように、人手不足になる夏休み期は、高校生や大学生にとって絶好のアルバイトのシーズンとなると共に、興味のある職種やオフィスでインターンとして働く機会にもなり、結果的にキャリア教育になっているのです。

就学前の0年生から高校生までが義務教育のフィンランドでは、小さい頃から自己選択する力を育みますが、高校生からは学級単位で授業を受ける機会も少なくなり時間割は自分でつくります。学校内には進路相談を担うキャリアカウンセラーはいますが、進路は自分で決めます。大学生に対しても、個人の就職を斡旋する就職支援課を設けている大学は決して一般的ではありません。



フィンランドの職業専門学校
(GRADIA)
バーテンダーを養成する教室の様子

◇フィンランドは世界幸福度連続世界一位



世界幸福度 (World Happiness Report) で6年連続世界一位となったフィンランドは、社会的支援が充実しているだけでなく、人生の選択の自由度と他者への寛容さが高いことが特徴的です。日本社会はとても安全で暮らしやすいですが、他人との違いに敏感で同調圧力が強く、過剰包装や過剰接待、丁寧すぎる教育サービスが当たり前になっていることで、みんなで多忙な日常を過ごしているように思えてなりません。自分の力でトライする前にレールが敷かれるということがないか、お節介をし過ぎていないか、横並びの発想から脱して問い合わせ直してみる必要があるように思います。

◇「教え込んだら子どもは学べない」

「教え込んだら子どもは学べない」と語るフィンランド人の教師の言葉を、あなたはどう受け止めますか？

フィンランドの教育を紹介する書物が、書店でもたくさん並ぶようになりますが、日本よりも学校以外の生活時間がとても長く、人々の家庭生活や生活価値観が、日本とは大きく異なる点にも目を向けてないと、フィンランドの学校教育を、本当に理解することにはならないのかも知れません。

世界幸福度ランキング

(2023年度発表資料より)

順位	国名
1位	フィンランド
2位	デンマーク
3位	アイスランド
4位	スイス
5位	オランダ
6位	ルクセンブルク
7位	スウェーデン
8位	ノルウェー
9位	イスラエル
10位	ニュージーランド
47位	日本

データは米国のギャラップ社調査のWorld Happiness Reportより



フィンランドの国花



分科会 1 「個別最適な学びを通して教科の本質に届く」

コーディネータ：藤本勇二（武庫川女子大）

話題提供：宗實直樹（関西学院初等部） 中西徳久（西宮市立甲東小）
河野倫平（尼崎市立上坂部小）

本分科会では、3名の先生方から個別最適な学びを通して教科の本質に届く学びにつながる取組の実際を報告いただいた。個の探究が一人ひとりの個性的でその子らしさが發揮されるときに、教科の本質に届くことを理科、社会科、図画工作科の事例を通して明らかにしていくことができた。

1. 「楽しい」と子供が感じる理科の授業

中西徳久先生（西宮市立甲東小）

問題解決の流れを汲んだ授業づくりを進める中で「楽しい」授業を足場にすることで教師の都合ではなく、一人ひとりの思考の流れが大切にされる。子どもが疑問に思ったことを解決できる場面を取り入れることが教科の本質に迫れる道であることを報告いただいた。

2. その子のイメージにとびこむ授業の在り方

河野倫平先生（尼崎市立上坂部小）

「石の形をとりだして」（6年生）の事例から自然石を削って磨く中で、思いが子どもの中に生まれ、その思いを形にするために知識・技能を働かせることで作品主義を抜け出せることの示唆をいただいた。行き方（学び方）や行く場所（学びの到達点）は、子どもが自分で決めるように支えることが教師の出番であり、指導性であることを提案いただいた。

「石の形をとりだして」
の実践より
石の形をじっと眺める



3. 社会科における「この子」の学び方を探る

宗實直樹先生（関西学院初等部）

1時間で完結しない授業にすることで、時間的・空間的な間が生まれる、それによって子どもが自己選択、自己決定をしながら学びを広げていく。そこから個性的な追求、自分らしい調べ方が生まれていくことの重要性を指摘いただいた。

4. 全体討議：子どもが学ぶ意味や価値を

その子自らがつくりだす

教科固有の見方・考え方を教師が自覚することによって子どもを見取れる余白が生まれる。子どもの育ちや伸びについての予感や手ごたえと教科固有の見方・考え方を構えておくことで見取ることができる。それが見通しのある空間や時間を用意することにつながっていく。「ゆだねる」ことが自分で決めることにつながる、「まかせる」ことで自由度をあげていく、子どもの思いや願いを「さぐる」、一人ひとりを「ささえる」、こうした教師の在り方を確認することができた。個の探究が一人ひとりの個性的でその子らしさが発揮されるときに、教科の本質に届くことを理科、社会科、図画工作科の事例を通して明らかにすることができたと言える。

（文責・兵庫・藤本）

分科会2 「子どもの学びの文脈を大切にする教師 —子どもと共に創る授業の構想と展開—



コーディネータ：渡部 力（東北文化学園大）

話題提供：佐藤みちる（宮城教育大附属幼）

中元千春（宮城教育大附属小） 鈴木美佐緒（宮城教育大）

本分科会では、校種の異なる3名の話題提供とともに、子ども（学習者）の学びの文脈をもとにした授業の構想と展開の要点について探った。「一人一人の子供を主語にする」授業の実像に迫る機会となった。

1 佐藤みちる先生（宮城教育大附属幼）

同じ遊びを楽しむ幼児一人一人への環境構成と援助～4歳児「ステージ遊び」の実践～

教師は好きな遊び（放任ではない自由遊び）を楽しむ園児の関心対象を観察し、思い思いの発言を聞き取る。3歳児の音楽に合わせたダンスの経験が、再度の遊びを望んでおり、表現遊びに繋がると感じ取った教師は、「園児自身が衣装や道具などを準備する過程も含めてステージ遊びを楽しんではほしい」と願う。観察し、見取った一人一人の発言や思いをもとに育てたい姿を設定する。意図的な環境構成と援助のもとで園児の没頭する活動が続く。

2 中元千春先生（宮城教育大附属小）

1年2組「おひさま学級」生き物仲良し大作戦～生活科「動植物の飼育・栽培」を通して～

本実践は、中庭で捕まえた虫に思い思いに関わる経験を足場にしてスタートする。育てたアサガオの種が虫に食べられる出来事は、虫を擁護する発言（そこにあった餌を食べていただけだよ）によって学級での飼育に繋がる。同じ対象への関わりが「それぞれ」にから「集団」になり、ついには「一人一カイコの飼育」になる子どもたちの発見や気付きを取り上げる学習は、必然性を伴った学びへと展開していく。

3 鈴木美佐緒先生（宮城教育大）

初等教育専攻2年次学生対象「生活科内容概論～野菜栽培活動～」の指導と支援

指導のねらいは、栽培活動を通し、子どもの学びの文脈をイメージできることである。学生自身の小学校時代の栽培経験を手繕り寄せ、身に付けた学習方法を駆使し、学友との協働的な活動のもとに各自選択した野菜を栽培する。枯れたり、育たなかつたりする野菜への向き合い方、結実する喜びなどを様々な方法で表現し、共有しながら子どもの内面の変化や情動に寄り添うことを企図する。感性を育む教育者の育成を意識した実践である。

分科会後半は、子どもの学びの文脈を大切にする授業の構想、展開について協議した。子どもの見取りについては以下の取り組みが紹介された。
①子どもの表情と活動を子ども目線で写真に収め、見取りに活用している。
②子どもの主体的な活動を待つように心がけている。
③1単位時間で学級の子どもを見取るには限界があるので、その日の教科全体を通して子どもを見取っている。
子どもの学びの文脈を大切にする授業は、子ども一人一人を見取る（教育的鑑識眼）ことによって支えられていることを確認した。

（文責・宮城・渡部）

分科会③「子どもをみとり・ニーズに応える 単元内自由進度学習」



コーディネータ：佐野亮子（東京学芸大）

話題提供：梶原捷聖（宇美町立桜原小） 村松央道（御前崎市立白羽小）
横山稔史（東浦町立北部中）

本分科会では、単元内自由進度学習の実践報告を足場に、取り組みの動機や準備の実際、授業でみられた子どもの姿や学びのエピソードを共有しながら、子どものニーズに応じる教師の指導の有り様、実践の手応えと評価、事後に見えてきた課題などについて協議が行われた。

実践報告は2つの小学校と1つの中学校から、それぞれに特徴があった。桜原小の梶原先生は、5年算数「速さ」で単元計画の工夫や、学習材や学習環境の準備、時中の子どもの様子などを具体的に示し、そこから教師が何を学んだかを報告した。白羽小の村松先生は、6年生の実践報告（算数と理科2教科同時、および、算数の2単元同時）に加えて、自由進度学習を行った前と後で、算数授業においてどのような変化がみられたか、6年算数の全単元の市販テストの結果をもとに知識・技能の習得や思考面についての分析を行った。また、北部中の横山先生は、英語科の実践で個別学習でも対話の場面をつくる手立てや、教師の解説動画やロイロノートを使った学習材の工夫、ALTの利活用について具体的な報告があった。

いずれの報告に対しても質問や意見が多く挙げられた。おおきくは評価（教師のみとりと子どものふり返り、定量的成果など）に関する内容と、教科の内容の学びと学び方に関するものであった。参加者からは、実践してみて生じた疑問や悩み、これから始めるにあたっての不安とかさなる質問もあり、3人の先生方の経験から得た手応えや確信に裏付けられた



学習環境から課題のヒントをさがす
子どもたち

力強い発言に「参考になった」「勇気をもらつた」という反応がたくさんあった。

単元内自由進度学習の特徴やねらいについては、事前に子どもにしっかりと説明し、事後に子どもの声を丁寧に聞くことの大切さや、同僚や保護者へ実践の意義や成果を発信していく重要性も話題になった。

「個別最適な学びの実現」という題目で実践するのではなく、「この子にこういう力を」「こんな学びの楽しさややりがいを」という教師の切実な願いが、子どもの心をつかむ創造的な実践を生み出す原動力になると感じる分科会であった。 （文責・東京・佐野）

分科会4 「小学校英語科の授業における子どもの学び —教科化とその展望—」



コーディネータ：加藤幸次（上智大 名誉教授） 伊藤静香（帝京平成大）
話題提供：片岡 彩（上智大大学院） 松本翔太（三郷市立彦成小）
伊藤静香（帝京平成大）

分科会4では、小学校英語の授業実践において①CLIL型の授業、②国際理解教育、③韓国の授業の視点から検討が行われた。

片岡先生の実践は、総合的な学習の時間で地域に関わる内容から子どもたちの興味・関心に基づき様々な観点で調べる作業から始まる。グループで協働的に活動し、まとめ上げ、英語で発表をするという学習活動の中で、最終的には“英語で”何かを学び、追究する過程を生み出し、「英語をもっと使いたい」「英語でどう表現するのか知りたい」といった子どもの英語に対する意欲が現れていた。

松本先生の実践でも、諸外国で学ばれている教科についてALTから多くの情報を得られた子どもは、「もっと他の国を知りたい」「英語ではどう表現するのか書いてみたい」という他国への関心の高さと意欲の向上に繋がる指導が行われている。さらに、クラスでのコミュニケーション活動を通して、相手の学習態度等からも良い点を発見できる過程全てが英語の授業に包括されていた。



ALTから多くを学ぶ子どもたち

片岡先生と松本先生の実践からは、教科書上の英語の言語的知識の獲得に留まらない学習活動の工夫と、子ども一人ひとりが楽しみながら、自分の興味や関心に基づく学びの追究までを見通した英語の授業構築に対する姿勢が立ち現れている。

また、内容(コンテンツ)から資質・能力(コンピテンシー)を重視する教育方法への転換を背景として、伊藤の発表では、韓国の授業実践についてオーセンティシティという観点から授業実践を検討した。

そこでは、英語科という教科が持つ本質である4技能の育成と英語運用力を育てるための徹底した指導の中で、英語での自然なコミュニケーションが成立している。その中で、子どもたちは英語を使って自分が表現したいことを生み出し、成果を発信している。

英語に慣れ親しむことから、教科化された日本の小学校英語教育について、英語科の本質を踏まえ、かつ、言語知識の習得に留まらない子どもの学びを深める授業実践を改めて検討する手がかりを得られた分科会となった。

(文責・東京・伊藤)

シンポジウム：多様な子どもの多様なニーズに応える教育の構想



コーディネータ：奈須正裕（上智大学）

シンポジスト：高橋 純（東京学芸大学） 涌井 恵（白百合女子大学）

加固希支男（東京学芸大学附属小金井小学校）

多様な子どもの多様なニーズに応える教育、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のあるべき姿について、奈須先生をコーディネータとして、シンポジストの方々からのご提案と参会者を交えた意見交流が行われた。

【高橋先生】個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を支える ICT

「令和の日本型学校教育」では、「一人一人の子どもを主語にする学校づくり」が大切である。そこに ICT 機器の活用、一人一台端末が大きく関わってくる。クラウド技術を使う GIGA スクール構想を進めている学校では、他者の学びを見たいタイミングで何度も繰り返し見返すことができるため、学習の高速化が進んでいる。そこでは「時短した深い学び」が可能となり、中学校では教科書や受験勉強を超えて、先を学びたがる子どもの変容に手応えを感じている。様々な学習用アプリが出てきて、軽い気持ちで何度も繰り返しやってできるようになるなど、これまでの勉強方法を大きく変わっている。

【涌井先生】インクルーシブでユニバーサルな個別最適な学びと協働的な学び

医学的な診断はないが学習が遅れがち、外国籍、複雑な家庭の子ども等、子どもは多様である。一人一人の学びは異なり、教え方に子どもの学び方を合わせるのではなく、子どもの学び方に合わせて教えていく。

そのためには、子ども自らが学び方を選べる複線化された授業が必要であり、特別支援教育の立場から“誰一人取り残さない”実践への挑戦をしている。

マルチ知能（8つの知能=言葉・数字・絵・体を使う・音楽・人・自分・自然）+3つの力“やる・き・ちゅ”（やる気・記憶・注意）を学習方略の観点とし、それを取り入れることで、子ども自身が自立した学習者として学び方を工夫することが可能となる。

【加固先生】多様な子どもの多様なニーズに応えるための教科教育のあり方

「個別最適な学び」の目的は、「生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続ける人に育てるここと」である。教科の見方・考え方（系統）を働かせることで、子どもは学べる。子ども自身が問い合わせに対して疑問をもつ目を育てることで、やらされている子ではなく、学ぶ子になる。子ども自らが体系化できるよさに気付くことで、学びが深まる。汎用性のある見方・考え方とコンテンツ



ツのある教科の見方・考え方のどちらも大事にする。ChatGPT のような全く想像しなかった技術が出てきたように、10 年後どう変化するか予測のできない時代、「学び方」を学ぶことの重要性を感じている。

【全体交流】奈須先生から「個別最適な学びが進むと学校に行く意味がないと言われる」と話題が振られると、「対面非同期のよさがあり『できた！』という呟きに刺激を受けたり、自然発生的な協働的学びが気軽にできたりするよさがある。仲間の追究を共有することも、『学級』という場の中で可能となる」という意見が交換された。また、奈須先生は「40 年前、加藤先生の指導の下、オープンスペースから個別化が始まった。今は ICT で学校が変わってきていている」と述べられた。

(文責・埼玉・熊坂)

自由研究発表



【1】 司会：村松麻里（金沢学院大）

奥泉敦司（金沢学院大）

(1) 奥泉敦司（金沢学院大）

「令和の日本型学校教育」を担う教師の
「養成」に関する一考察

—教職課程履修学生の実態からの検討—

(2) 村上剛志（江戸川区立葛西小）

齊藤 勝（帝京平成大）

個別最適な学びを促す段階的な ICT 活用
の検討

(3) 齊藤 勝（帝京平成大）

ICT 活用による授業改善が学級状態及び
児童のスクールモラールに及ぼす影響の
検討

(4) 村松麻里（金沢学院大）

子ども主体の言語の学びについての一考
察：あそびと物語の視点から

(5) 小山貴博（名寄市立大）

イラン第 1 世代女性の子育て観
—イスラーム法・戒律における
融合と乖離—



事務局への問い合わせ 庶務部長 佐久間茂和

〒362-0064 埼玉県上尾市小藪谷 77-1 3-28-502

TEL 080-5429-1681

E-mail sakuma.shigekazu@jcom.zaq.ne.jp

日本個性化教育学会 HP <https://koseika.com>

【2】 司会：藤本勇二（武庫川女子大）

中島 信（立命館小）

(1) 中島 信（立命館小）

吉永かおり（立命館小）

異教科異学年でつながる教科単元計画
の立て方—専科制のデメリットを超える
ために—

(2) 箱根正斎（兵庫教育大学附属小）

個の探究の在り方—社会科の資質・能
力の育成を目指して—

(3) 松井香奈（大阪市立吉野小）

藤本勇二（武庫川女子大）

ミニトマトとの関わりの中で自分の成
長を願う子どもの育ち

(4) 田中咲也子（西宮市立今津小）

藤本勇二（武庫川女子大）

個に応じた手立てを通して深い学びを
を目指す学校探検

(5) 青木 靖（鹿沼市立板荷中）

小規模校での地域と連携した特別活動
のあり方の考察

—小中合同運動会の考察を通して—

日本個性化教育学会 第 41 号

2023 年 9 月 24 日発行

編集責任者 事務局長 奈須正裕

編 集 中澤米子

2022年度 日本個性化教育学会 会計報告

2023年8月6日(2023年3月31日締め)

【収入の部】

項目		予算	決算	備考
会費	個人会費	400,000	592,000	4000×148
	団体会費	7,000	7,000	7000×1
繰越金		724,498	724,498	前年度繰越金
研修会参加費		500,000	431,440	全国大会参加費
学会誌掲載協力金		30,000	30,000	学会誌掲載協力金
合計		1,661,498	1,784,938	

【支出の部】

項目		予算	決算	備考
事業費	全国大会運営費	200,000	125,220	謝礼金・返金
	春季研究会運営費	50,000	5,700	雑費
	学会誌刊行費	500,000	400,030	会誌編集印刷・編集通信費
	広報活動費	200,000	133,772	会誌・会報発送・HP運営費
事務費	郵送・通信費	100,000	26,110	国際郵便・ハガキ代等
	消耗品費	100,000	25,427	封筒印刷・ラベル等
	諸費	511,498	2,380	慶弔費・返金・手数料
合計		1,661,498	718,639	

○【差し引き残高】 $1,784,938 - 718,639 = 1,066,299$

上記の通り決算報告いたします

会長 加藤幸次 事務局長 奈須正裕 会計部長 五十子晴美

以上相違ないことを報告いたします

会計監査 中澤米子 松本和平 (印章略・・監査承認ハガキを受理しています)

2023年度 日本個性化教育学会 会計予算案

2023年8月6日

【収入の部】

項目		内訳	予算
会費	個人会費	4000×100	400,000
	団体会費	7000× 1	7,000
前年度繰越金		1,066,299	1,066,299
会誌論文投稿料		5000×6	30,000
研修参加費		2000 (会員) 3500 (非会員)	500,000
合計			2,003,299

【支出の部】

項目		内訳	予算
事業費	全国大会運営費	夏の大会の運営	200,000
	春季研究会運営費	会場費・発表者交通費等	50,000
	学会誌刊行費	学会誌編集印刷・編集通信費等	500,000
	広報活動費	会報発送・ホームページ運営	200,000
	活動補助費	東北・東海・関西・九州個研運営補助	200,000
事務費	郵送・通信費	連絡通信費	150,000
	消耗品費	印刷・文具費	150,000
	諸費	弔電・手数料・予備費	553,299
合計			2,003,299

会長 加藤幸次 事務局長 奈須正裕 会計部長 五十子晴美